

ゴイシジミの飼育

堀 田 久

筆者は本年(1980年)8月10日、洲本市中川原町安坂でゴイシジミ *Taraka hamada Druce* の卵・幼虫・蛹を採集して飼育したので、これまでの野外における観察の記録と併せて報告しておきたい。

飼育方法

湿らせた吸取紙を敷いたシャーレーに幼虫を入れ、食餌としては中川原町安坂ならびに、洲本市安乎町浜のメダケに寄生するタケノアブラムシを与えた。なお、このアブラムシは、本種が発生していない地域で採集したメダケの葉にはどうしても寄生しなかった。

卵の形状

卵はタケノアブラムシが寄生するメダケの葉裏に1個ずつ産付されている。1枚の葉には普通1~2個の卵が見られるが、多いものでは5個の卵が認められた。

卵の概形は背の低い円柱状で、上面も平らに近く、卵殻面には網目状の弱い隆起が見られる。全体に白色で直径は約0.5mm、高さは0.1mm程度である。

1令幼虫

幼虫は卵の上面中央部にまるい穴をあけて脱出し、卵殻は食べない。孵化直後の幼虫は円筒型で、体長は約1.5mm、頭の幅は0.15mm程度、全体にごくうすい黄褐色で透明に近く、餌をとると消化管が黒くなるのがよくわかる。胴部には長い毛を密生する。タケノアブラムシの群中でテントを作り、その中にひそんでいる、時々まテントから出て歩き回ることがあっても、すぐにテントに戻るようである。

2令幼虫

体長は約3mmで頭の幅は0.3mm程度、体はまだ円筒型に近いが、頭部は淡褐色で胴部の背面は灰色に変わり、各節には1対の暗色斑が見られる。テントから出ることは殆どなく、テントにかかった小さいアブラムシを捕食する。幼虫はテントの中で糞をするが、面白いことに頭でその糞を根気よくテントの外へ押し出すのである。

3令幼虫

体長は約6mmで頭の幅は0.5mm程度、胴部は扁平になり腹部の中央部で横幅が最も広がる。長い毛にタケノアブラムシが分泌する白粉をつけているが、胴部の地色も白色で光沢がある。各節の背面に1対の暗色斑がある。テントは作らず、アブラムシの群中に静止してあまり移動

しないようである。

4 令 幼 虫

体色や形状は3令幼虫とよく似ているが、胸部と腹部の境付近で細くなり、腹部の第3節と第4節が最も広くなるので、全体としてはひょうたん型になる。各節の背面にある1対の暗色斑のうち、腹部の第1節と第6節のものが、特に黒くて目立っている。4令幼虫の食欲はものすごく、もりもりとタケノアブラムシを食べて体長は11mm程度になる。

頭の幅は約1mm、4令幼虫も餌がある限りあまり移動しないようである。

前 蛹 と 蛹

前蛹の体長は約8mm、全体に透明な感じの白色である。背面の暗色斑は殆ど消失するが、腹部第1節と第6節の斑紋は残っている。

孵化は、自然状態ではメダケの葉裏で行われるが、飼育した場合はメダケの葉上かシャーレの壁面で行われる、尾端を糸につけて体を固定する。

蛹の概形は、体長に対して腹部の横幅が目立って広いため、下ぶくれのだるま型で腹端部は細くなって突出する。全体に淡褐色で、隆起した腹部の背面には褐色の輪のもようが見られる。体長は7mm程度であるが、食餌の量が少ないと小型の蛹になり、体長5mm程度のものがあつた。

飼 育 経 過 の 1 例

飼育した中で、成長の最も早かつたものの記録を次にあげておく。

1980年8月10日	卵を採集
8月11日	孵化(1令幼虫)
8月13日	1眠起(2令幼虫)
8月15日	2眠起(3令幼虫)
8月17日	3眠起(4令幼虫)
8月20日	前蛹
8月21日	孵化
8月28日	羽化(♀)

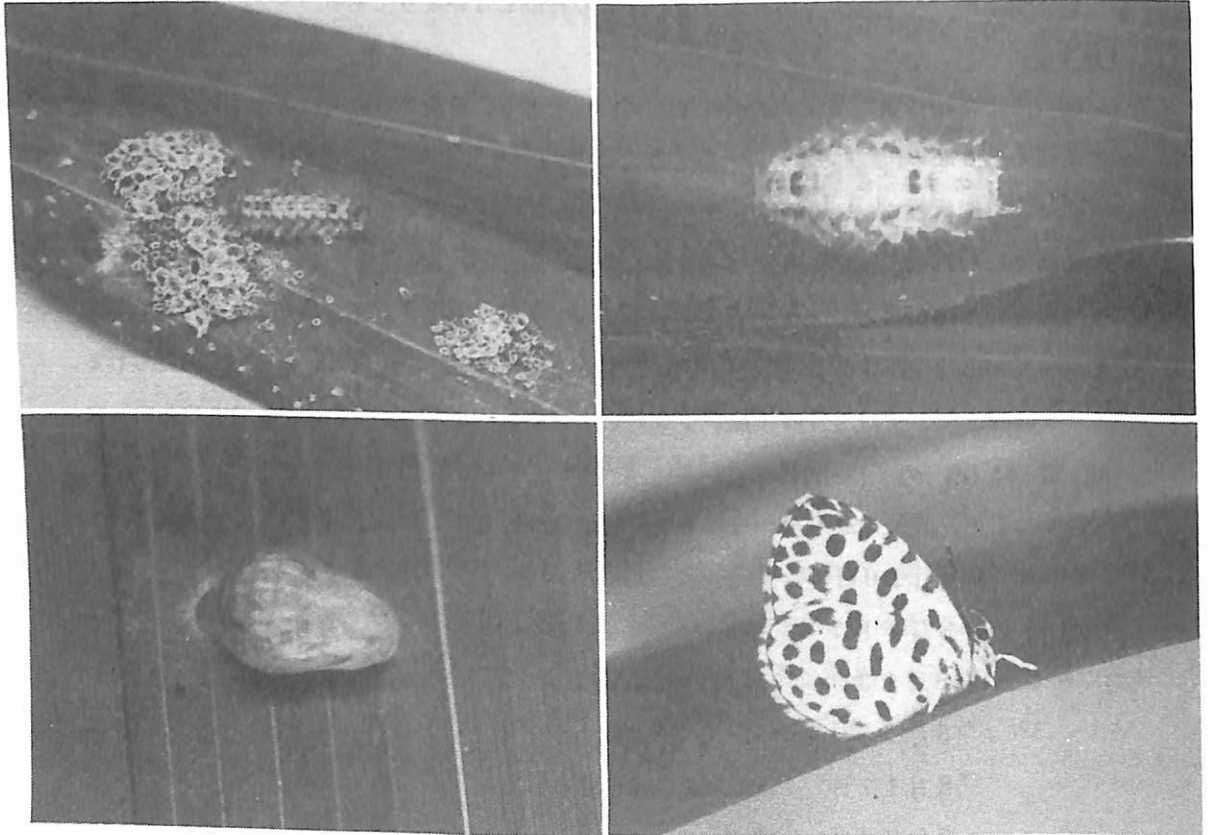
成 虫 の 活 動

羽化した成虫は、1時間もするとかなり飛べるようになる。野外での観察では、午前中はアブラムシの群生するメダケの葉裏に静止していることが多く、驚いて飛び立ってもすぐに近くの葉に止まる。

♂は夕方活動することが多いようである。淡路島ではまだ確認していないが、対馬での採集

のおり、本種の♂が夕方樹林内の空地で数頭が入り乱れて飛び回るのを目撃している。

なお、本種は年によって発生量の変動が著しいと言われるが、今年の夏は島内の各地にタケノアブラムシが多数発生し、それにともなって成虫の個体数も多くなったようである。



ゴイシジミの4令幼虫(左上) 前蛹(右上) 蛹(左下) 成虫♀(右下)